

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 27 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03290

研究課題名(和文) 日本軍の皇民化政策と対日ムスリム協力者の記憶：植民地経験の多声的民族誌

研究課題名(英文) Japan's imperialization policy and the memories of Chinese Muslim collaborators with the Japanese Army: Polyphonic ethnography on colonial experiences

研究代表者

澤井 充生 (sawai, mitsuo)

首都大学東京・人文科学研究科・助教

研究者番号：20404957

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本軍占領下にあった内モンゴル(現フフホト市)、華北の北京市、東北の遼寧省瀋陽市を調査地として、日本軍の皇民化政策(主に対ムスリム懐柔・宣撫工作)を実際に見聞きしたムスリム(回民)およびその遺族の証言を可能なかぎり収集・整理し、日本軍の皇民化政策の全体像を浮き彫りにし、日本軍に協力したムスリムの植民地経験を丹念に記述・記録した。文献調査およびインタビュー調査にもとづく成果は現地住民の証言や研究者の解釈を盛り込んだ多声的民族誌として作成・刊行し、専門家だけでなく、現地住民との間で一次資料を共有できるよう工夫を凝らした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、植民地人類学の手法を援用したが、「過去の出来事」の記録のみを目的としているわけではない。日本軍の植民地支配および対日協力は現代中国においても当事者およびその遺族の政治的立場や評価に対して現在も暗い影を落としている。つまり、植民地経験は単なる「過去の出来事」なのではなく、国家権力の意向に沿ったかたちで再解釈・政治利用される現代的産物でもある。このような植民地経験の現代的位相を念頭に置きながら、現地住民(特に少数民族)の口述資料を収集し、民族誌として記録・発表できたことは資料的価値が高く、また、挑戦的な試みであると言える。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I clarify the overall picture for the imperialization policy (mainly the so-called "Islam Campaign") of the Japanese Army and describe the colonial experiences of Hui Muslims who cooperated with the Japanese Army mainly in Huhehaote city of Inner Mongolia, Beijing city, and Shenyang city of Liaoning province by collecting the testimonies of Hui Muslims and their families who actually witnessed and heard about the imperialization policy of the Japanese Army. The research findings of this research project, based on document research and fieldwork in China, were published as a polyphonic ethnography, incorporating the testimonies of the local people and the interpretations of researchers, so that primary sources could be shared with the local people as well as with experts.

研究分野：社会人類学

キーワード：植民地人類学 皇民化政策 中国ムスリム 歴史記憶 植民地経験

1. 研究開始当初の背景

日本の植民地支配に関する研究では、朝鮮・台湾・中国・東南アジアなどの諸地域における植民地政策、皇民化政策と日本語教育、日本の植民地主義と日本民族学の「共謀関係」、満洲国や華北地方の村落社会などの問題が実証的に研究されてきた。中国研究では華北地方の農村慣行、家族・親族、都市の同業者組合などの実態調査などがその資料的価値を世界的に高く評価されている。しかしながら、先行研究には日本軍占領下の漢族を対象としたものが圧倒的に多く、少数民族の存在は、ごく一部を除き（例えば楊海英の研究）研究対象から捨象される傾向にある。実は、満洲国や内モンゴルには漢族のほか、数多くの少数民族（モンゴル人、朝鮮人、満人、回民、タタール人、ユダヤ人など）が生活し、豊富な調査資料が残されたが、現在、学术界であまり有効活用されていない。

中国の回民に関していえば、日露戦争後、日本軍・外務省・民間団体が中心となって満洲国の建設や蒙疆政権の樹立を進めながら回民に対する宣撫・懐柔工作を広範囲に展開した。その結果、漢族と同様、回民のなかにも対日協力が登場し、モスクは日本軍の統制・監視下におかれ、青少年や婦女に対して日本語教育が実施された。日本軍撤退後、対日協力者は国民党・共産党政権下で「裏切り者」として熾烈な政治弾圧の犠牲者となり、回民社会の伝統的な権力構造が根底から覆された。このように、日本軍占領および対日協力が中国の少数民族社会に与えた影響は等閑視しがたい。

学术界の研究動向に目を向けると、日本軍の対回民宣撫・懐柔工作（回教工作）については、新保敦子、坂本勉、松本ますみ、安藤潤一郎、島田大輔らを中心に文献研究が進められ、緻密な史料批判が高く評価されている。しかしながら、文献調査に重点が置かれるため、現地住民に対するインタビュー調査がほとんど実施されておらず、当事者およびその遺族が見聞きした出来事の記録・整理が等閑視されている。また、歴史学者の文献研究は政策研究の側面が強く、日本軍の植民地支配が現地住民の価値観・集団・組織・構造のありかたに多大な衝撃を及ぼしたにもかかわらず、植民地経験が深く掘り下げられて検証されることがない。「歴史の生き証人」が姿を消す現在、日本軍占領を体験・経験した当事者および遺族の記憶を文字資料として早急に記録する必要がある。

2. 研究の目的

先に述べた研究動向をふまえ、本研究では、日本軍の皇民化政策を経験した回民の記憶と言説に注目する。日本軍が占領した中国の少数民族地域は実は広範囲におよぶが（例えば、満人、朝鮮人、モンゴル人、回民など）少数民族の植民地経験は中国共産党政権下ではセンシティブな問題のひとつであり、特に日本軍に協力した少数民族の存在は中国共産党の正史から抹消されることが少なくない。対日協力者は侵略者の日本軍に利することをしたため、1945年以後、中国国民党および中国共産党にとっては「裏切り者」として位置づけられている。

民族や地域によって若干の差異はみられるが、「裏切り者」の対日協力者は必ずしもごくわずかな少数派なのではなく、実際は数多くの人びとが日本軍と協力関係にあった。例えば、内モンゴル・フフホト市の回民の場合、日本軍がイスラームのモスクや伝統行事を保護し、また、近代的な日本式学校教育や少年団・青年団・婦女協会を組織し、「貧民」とみなされていた回民をとりまく社会環境が改善されたことがある。このような植民地経験は中国共産党政権下では正史では語ることができない。また、かつての歴史を知る古老たちが毎年のように他界するため、植民地経験の実態（正負の遺産をともに含む）が後世に語り継がれなくなっている。

このような状況をふまえ、本研究では、日本軍占領下にあった北方の内モンゴル（フフホト市）華北（主に北京市）東北（遼寧省瀋陽市）を研究対象地域として、文献調査だけでなく、日本軍占領を実際に見聞きした人びととその遺族の証言を可能なかぎり収集することによって、日本軍の皇民化政策（主に対回民宣撫・懐柔工作）の全体像を浮き彫りにしながら、個々人の植民地経験を丹念に記述し、証言者や研究者の様々な解釈を盛り込みながら多声的民族の記述および共有（例えば、データベース化、冊子刊行）を目指す。

3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は、文献調査、フィールドワーク（主にインタビュー調査）からなる。

文献調査では、日本や中国の図書館や資料室などにおいて日本の皇民化政策（主に対回民宣撫・懐柔工作）に関連する文献資料（主に日本語、中国語）を収集・整理した。日本国内における主な文献収集先は、東洋文庫、アジア経済研究所、学習院大学東洋文化研究所などであり、日本軍関連史料を閲覧・複写することができたが、神保町で開催された古書入札会においても非常に珍しい史料（『回教月刊（西北鐘声）』）を購入することができた。『回教月刊（西北鐘声）』は、日本国内の図書館・資料室には所蔵されておらず（中国社会科学院近代史研究所図書館にしか保管されていない）貴重な史料である。最終年度の成果報告書（紙媒体）にはその一部をPDF化し、掲載した。中国国内における主な文献収集先は北京市の古書店、内モンゴル自治区フフホト市の図書館などであるが、公刊資料には目新しいものはなかったが、内モンゴ

ル自治区フフホト市、北京市では回族の郷土史家から資料的価値の高い文献資料（私家版）を譲り受ける機会に恵まれた。このような資料は中国政府が検閲した公刊資料とは異なり、珍しい情報や新しい事実を提供してくれる。

2017年度から2019年度までのフィールドワークでは、2017年8月に内モンゴル自治区フフホト市、2017年11月に遼寧省瀋陽市、2018年3月に北京市、2019年3月に北京市、2019年4月・5月に内モンゴル自治区フフホト市、北京市へ赴き、現地調査（主にインタビュー調査）を実施した。現地調査では、調査項目（例えば、日本軍占領期の皇民化政策の具体的内容、当時の清真寺の統制・監視状況、日本語学校や日本人教員の有無、日本軍に協力した主要人物の背景、1945年以後の対日協力者の処遇など）を事前に準備し、中国の政府機関（人民代表大会、民族事務委員会、宗教事務局）や宗教団体（イスラーム教協会）、研究機関（中国社会科学院）の関係者から専門的な意見を拝聴し、本研究課題に必要な情報や情報提供者を紹介してもらうことができた。現地研究協力者に対しては日本国内で収集した文献資料（旧蔵写真、史料を含む）を提供し、できるかぎり情報を共有するよう努めた。そのほか、内モンゴル自治区フフホト市においては日本軍の皇民化政策を見聞きした回民の人々およびその遺族に知り合い、インタビュー調査によって貴重な口述資料を収集・記録することができた。当時の関係者の写真（若い頃の姿が写ったもの）を遺族へ差し上げ、喜ばれたことがある。このような現地の人々との協働作業をつうじて、日本軍の皇民化政策に関与した「対日ムスリム協力者」の人物像を具体的に把握することができた。

4. 研究成果

内モンゴル自治区フフホト市における調査成果

まず、フフホト市では人民代表大会の共産党員（回族）とともに意見交換をおこない、そのうえでインタビュー調査の準備を行った。この人物はフフホト市出身の回族（世話人）であり、内モンゴル回民の近現代史に造詣が深く、文献調査および現地調査を進めるうえでの注意点をご教示いただいた。その後、回民中学の元教員（回族）から協力を得て、内モンゴル自治区イスラーム教協会、清真大寺、清真東寺、清真小寺などの清真寺を訪問し、日本軍や日本人を知る古老数名（例えば、西北回教聯合会の関係者）やその遺族に対してインタビュー調査を実施することができた。古老たちが語る体験談は断片的なものではあったが、既存の文献研究の不備を補足しうる情報を提供しうるものであり、資料的価値が高い。例えば、西北回教聯合会の元幹部（回民）に関するいくつもの証言、小村不二男という日本軍特務機関員との思い出話を収集できたことは大きな成果である。また、2017年9月にはイスラームの犠牲祭に参加する機会があり、年中行事や屠畜業などの慣習にも注意を払い、1949年以前と以後でどのように変容したのかという問題についても当事者の声を聞くことができた。日本の植民地に関する研究では政策研究に偏りがちであるが、住民の日常生活に注目することによって日本軍占領下で生きた回民の植民地経験を具体的かつ多面的に記述・描写することができると考えられる。

北京市における調査成果

北京市では市内に分布するいくつかの回族集住区を調査地とし、インタビュー調査および文献調査を実施した。北京市は1937年に盧溝橋事件の後、1945年まで日本軍に占領されたが、その間、日本軍は北京市の清真寺および回民を支配するために中国回教総聯合会という傀儡の宗教団体を組織した。北京市には牛街、馬甸、海淀、花市、常営などの回民集住区がいくつも存在し、日本軍特務機関は宣撫・懐柔策を回民に対して積極的に展開し、国民党や共産党に対する抵抗戦線の結成を画策した。このような歴史的背景をふまえ、現地調査では牛街、馬甸、花市などにある清真寺を訪問し、日本軍占領期の史料を参照しながら清真寺の分布状況を把握した。また、清真寺で知り合った回族の古老（郷土史家）に対してインタビュー調査を実施し、日本軍占領期の回民の生活状況（例えば、牛羊業、駱駝運送業）に関する詳細な情報を収集するとともに、1949年以前の清真寺や回民の様子を記録した資料を入手することができた。このような資料は中国の公的な資料とは異なり、民衆の歴史認識を反映したものが多く、資料的価値が高い。そのほか、北京市では内モンゴル自治区出身の回族に会い、その人物の父方祖父についてインタビュー調査を実施した。その人物の父方祖父は日本軍特務機関が内モンゴルに設置した西北回教聯合会において重要な役職にあり、日本軍が企画した回教徒訪日視察団に参加したことがあり、祖父の思い出話を断片的ではあるものの拝聴することができた。

遼寧省瀋陽市における調査成果

遼寧省瀋陽市は旧満洲国時代に奉天市と改称され、地政学的な見地から日本軍（関東軍）の植民地支配（満洲国経営）において非常に重要な位置づけにあった。また、奉天市には回回営と呼ばれる回民集住地域があり、日本軍（関東軍）は回民に対する宣撫・懐柔策を積極的に展開したことがある。中国東北では珍しく、瀋陽市には回族の伝統的なコミュニティが現在も維持されており、日本軍による回民に対する皇民化政策を調査・研究するにあたって等閑視でき

ない都市である。このような特徴をふまえ、現地調査では瀋陽市の回回営および清真寺を訪問し、旧満洲国時代の日本語資料を参照しながら清真寺の分布状況（移転や増減）を把握し、また、1945年以降の回民社会の消滅・減少についても調査を実施した。1949年以降、瀋陽市では、中国共産党主導の社会主義建設や文化大革命などによって清真寺の大半が閉鎖または破壊され、清真南寺を除き、伝統的なコミュニティの大多数が消滅したことがわかった。満洲国時代を知る回民の古老については、研究協力者（回族）からその親族（日本軍の憲兵隊に関わった協力者）を紹介してもらい、断片的であるものの貴重な情報を収集することができた。内モンゴルや華北の事例と比較するという意味で、遼寧省瀋陽市の現地調査は有意義なものであった。旧満洲国の対ムスリム懐柔・宣撫工作に関しては、今後、文献調査およびインタビュー調査を綿密に実施する必要がある。

研究成果の公表・社会的還元

現地調査のほか、本研究課題では以下のような国際会議および研究会を企画・開催し、また、成果報告書を紙媒体として作成・刊行することによって、日本軍の皇民化政策と中国ムスリムの植民地経験に関する専門知識を精査し、関係者のあいだで広く共有できるよう工夫を凝らし、学術成果の社会的還元を強く意識した。

国際会議の開催

2018年11月10日、国際会議“Japan-China War and Colonial Experiences of Chinese Muslims: Comparative Analysis of the Islam Campaigns between the Chinese Nationalist Party and the Japanese Army”を首都大学東京において開催し、台湾政治大学から包修平氏（Bao Hsiu-ping）を招聘し、“A Forgotten History of a Public Diplomacy: Chinese Muslim Delegation to the Middle East, 1937-1939”という研究発表を依頼した。中華民国期のムスリムを研究する研究者が来場し、包修平氏の質疑応答では活発な議論を行うことができた。

国内研究会の開催

2019年11月30日、国内研究会「日本軍の皇民化政策と中国ムスリムの植民地経験 内モンゴル・満洲国・国民政府の回教工作をめぐる比較検討」を首都大学東京において企画・開催し、立命館大学大学院に在籍していた田島大輔氏を招聘し（発表テーマ「川村狂堂の経歴をめぐって 「満洲伊斯蘭協会」会長在任時を中心に」）、千葉商科大学非常勤講師の矢久保典良氏（発表テーマ「国民政府の「回教政策」と中国ムスリム 日中戦争時期を中心に」）を招聘し、最新の研究成果を発表してもらった。同研究会には日本軍の回教工作に詳しい研究者（若手中心）が集まり、建設的な議論、有意義な情報交換を行うことができた。

成果報告書の作成・刊行

最終年度の9月以降、それまで収集した文献資料および民族誌的資料を整理した。成果報告書の作成にあたり、まず、既存の文献資料および現地調査で収集した民族誌的資料を整理・検討し、本研究課題に関する事実関係および問題設定の妥当性を確認した。その後、主に民族誌的資料を参考にしながら、3月に成果報告書を仕上げ、印刷物として刊行し、日本国内外の研究者に配付した。

ここまで述べたことをふまえ、本研究課題の成果をまとめておきたい。まず、最初の研究成果として、日本軍占領を経験した中国回民の歴史記憶・経験を多声的民族誌として記述・共有するという特色を指摘することができる。回民研究では、歴史学者による植民地研究では資料的制約から政策研究に重点が置かれ、現地住民の「顔」や背景が捨象される傾向があるため、現地住民の社会像が具体的に描写・記述されることが非常に乏しい。そこで、本研究では基礎資料収集のための文献調査も実施したが、現地住民に対するインタビュー調査に重点を置いた。すなわち、現地住民が現地地で培ってきた経験を尊重し、現地住民間の関係の網の目（利害関係）にも目配りし、彼ら自身の様々な解釈をも資料として盛り込み、多声的な民族誌を記述することに力点を置いた。具体案として、現地住民の情報提供者や研究者との意見交換・文献調査を積極的に実施し、文献資料・口述資料の共有・公開（例えばデータベース化、史料集としての出版）を視野に入れており、調査・研究成果の社会的還元を強く意識した。実際、文献調査で収集した貴重史料（『回教月刊（西北鐘声）』）を成果報告書（紙媒体）に掲載・刊行し、日本国内外の関係者に配付した。

第二の研究成果として、中国共産党・政府が作成する正史とは異なる視点から少数民族の植民地経験を記述するという研究手法を挙げることができる。中華人民共和国の「周縁」に追いやられている人びとの証言に注目することによって、国家権力の歴史観から一定の距離を保ちながら、日本軍の植民地支配の地域的展開および特性（もちろん暴力性を含む）を客観的に分析することができる。特に、日本軍が漢族社会だけでなく、少数民族社会をも侵略し（例えば内

モンゴル) 日本軍が皇民化政策を被占領地の民族や宗教をとりまく情勢を考慮しながら巧妙に展開したことを把握し、その問題性に検討を加えることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 澤井充生	4. 巻 35-2
2. 論文標題 「現代中国の回族社会における屠畜の周縁化 動物供犠と殺生忌避の事例分析から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本中東学会年報』	6. 最初と最後の頁 129-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 澤井充生	4. 巻 516-2
2. 論文標題 「羊に死者の罪を背負わせる 「一神教的人間中心主義」再考」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『人文学報』	6. 最初と最後の頁 93-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 澤井充生	4. 巻 0
2. 論文標題 Is Turkish Muslim 'Uthman a "Da'i" or "Intelligence Agent"?: "Collaboration" between Japanese Army and Muslim Minorities in China.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Abdurrestit Ibrahim ve Zamani	6. 最初と最後の頁 111-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 澤井充生	4. 巻 515-2
2. 論文標題 イスラモフォビアと「宗教中国化」の親和性 中国イスラーム界のディストピア化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 113-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 澤井充生	4. 巻 83-3
2. 論文標題 書評 楊海英『最後の馬賊 「帝国」の將軍・李守信』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 498-501
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤井充生	4. 巻 514-2
2. 論文標題 近現代内モンゴルの政治変動と回民社会 『中国回教社会の構造』のその後	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 107-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 澤井充生	4. 巻 0
2. 論文標題 社会主義を経験した回民のハラール産業 近現代中国における伝統知の変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the International Workshop on Halal Food Consumption in East and West	6. 最初と最後の頁 151-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 澤井充生	4. 巻 0
2. 論文標題 Remembered Sufi Saint: Reconstruction of a "Gongbei" and the Struggles for the Leadership in Ningxia	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization	6. 最初と最後の頁 235-254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 「社会主義を経験したハラール産業の栄枯盛衰 現代中国における伝統知の継承と断絶」
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 「現地住民との邂逅と裏切り 希望に満ちたフィールドワークという虚像」
3. 学会等名 中国ムスリム研究関連情報交換会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 「中国領内に蔓延するイスラモフォビア 習近平政権下の宗教統制との関わりから」
3. 学会等名 科研費研究会「中国ムスリムの超国家・超民族的ネットワークの構築と多文化共生圏の創出に関する研究」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 「日本軍に協力した“回奸”の面従腹背 植民地支配を経験した回民のライフ・ヒストリー」
3. 学会等名 科研費研究会「日本軍の皇民化政策と中国ムスリムの植民地経験 内モンゴル・満洲国・国民政府の回教工作をめぐる比較検討」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 「自著を語る 『現代中国における「イスラーム復興」の民族誌 変貌するジャマアの伝統秩序と民族自治』」
3. 学会等名 中国ムスリム研究会第36回定例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 日本軍と接触した“回奸”のライフ・ヒストリー 内モンゴルに暮らした回民の植民地経験
3. 学会等名 国際会議「日本と東アジア 現代史研究の新史料・新手法・新成果」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 The Survival of a Chinese Muslim Traitor: Colonial Experience of a Muslim Leader in Inner Mongolia
3. 学会等名 The International Conference “Japan-China War and Colonial Experiences of Chinese Muslims: Comparative Analysis of the Islam Campaigns between the Chinese Nationalist Party and the Japanese Army” (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤井充生
2. 発表標題 ハラール食品を生産する伝統的技法の変容ー内モンゴル・華北に暮らす回族の事例から
3. 学会等名 2017年第3回アジア・ムスリム研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 澤井充生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 首都大学東京	5. 総ページ数 112
3. 書名 『羊を屠り、神に祈る 近現代中国回民社会史』	

1. 著者名 澤井充生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 首都大学東京	5. 総ページ数 190
3. 書名 『日本の皇民化政策と対日ムスリム協力者の記憶 植民地経験の多声的民族誌』	

1. 著者名 澤井充生	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 528
3. 書名 現代中国における「イスラーム復興」の民族誌 変貌するジャマアアの伝統秩序と民族自治	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考